

豊川（愛知県）

加藤貴之

私は愛知県豊橋市に住んでおり、昔から近所の川によく遊びに行ったりしていた。その中でも特に印象に残っているのが豊川である。東三河地域の水がめと呼ばれるぐらい私が住む地域では重要なもので、愛知県の北設楽郡にある段戸山という標高1157メートルの地点から流れ出し、流路延長は77キロメートル、流域面積は724平方キロメートルで、三河湾へと流れ出る。また愛知県豊川市の名前の由来でもある。



上流においては豊橋東部の山間部を流れ、比較的自然のままの状態に残されており、周りを森に囲まれているためか水質は全国162河川中20位でかなり清浄な川である。少し川を下ると辺りが開けてきて、周りに若干家屋も見られ、対岸も整備されているので夏にはキャンプ客や遊泳客でにぎわう。川幅は約30mと広くて遠浅である。さらに少し下るとだんだんと川幅が狭くなってきて、川が描く曲線も複雑になってくる。

私は子供のころに何回も家族で豊川の上流に遊びに行った。幼稚園、小学校のころなので10年ほど前のことなのだが、流れがそれほど急でもないことに加えて、浅い面積が広いのでのびのびと遊べた記憶がある。夏にはこの川で花火大会が行われ毎年見学に行っている。川に映る花火が非常に印象的であった。また、小学生のときに市の川に関するイベントに参加して、豊川を下ったり、

水質調査を行った。川にすんでいる水生生物を調べ、川の水に含まれている成分を調査した（測定は、水に含まれている化学物質の量、BOD（生物化学的酸素要求量）、およびペーハーを調べることにより行った）ところ、生態系が非常に多様である上に、水質が全国20位であることに違わず非常に質のいい水であった。現在でもこの水質をキープしている。また、私の母も生まれたときから豊橋市に住んでおり、豊川には頻繁に遊びに行った。上流は周りの家屋の数が増えたぐらいで今での昔の様子を保っているが、中流は対岸整備によりかなり変化したようである。現在では一部で高い堤防を作り川に入れないようになっている場所もあるが、昔はそのような場所は一切存在しておらず、今では5m以上の堤防が建っているところでさえ普通に川に入って遊べたようである。また水質は詳しく調べたわけではないようだが、川の水の見た目を比べてみると、昔のほうがよりきれいだったようである。決定的な違いは中流に住む水生生物の数であるようで、現在でも決して少ないとはいえないのだが、私の母がよく遊んでいたころは数え切れないほどの多種多様な生物がすんでおり、よく捕まえて遊んでいたようだ。

ネットで豊川について調べてみたところ、愛知県において木曾川、矢作川に並び愛知三大河川と呼ばれており、もっとも特徴的なことは、川況係数と呼ばれる最大流量と最小流量の差が飛びぬけて大きいことである。流路が短いことや、山間部を通っていること、また年間の降水量が非常に不安定であることが原因でそうなったのであるが、このような不安定な性質を持つ豊川は大雨が降れば洪水となってしまう、日照りが続くとすぐ渇水になってしまう、一昔前の農民としてはかなり厄介な川として扱われており、この川を治水することは昔からの願いだった。豊川用水が作られて三十年ほどたった今、非常に農業が盛んな地域になり、平成15年には農業祖生産額が全国1位になるという快挙も

成し遂げた。かつては農業をするどころではなかった土地が、今では大成功を収め、戦後で最も成功した大規模灌漑事業の一つと言われている。そして現在でも、市が積極的に川の整備、質の向上、生態系の保存に力を入れており、今でもすばらしい環境を維持している。

豊川は豊橋市にもたらしてくれた恩恵は計り知れないものがあり、今でも市民の憩いの場として豊橋市の市民生活の質の向上に一役買っている。私は豊川がこのような歴史を持っていること、また全国でも有数の水の質を維持していることを誇りに思っている。水質汚染が日本中で騒がれている今、このような川の存在は非常に貴重なものであるし、これからも維持していきたいかけがえない財産である。そしてもちろん水質も大事だが、私はこの川がこれからもずっと市民に愛される川であってほしいと思っている。おそらく多数の人が幼少のころ地元の川で遊んだ記憶を、周りの環境や自然とともに記憶しているであろう。今でも夏休みに実家に戻ったときにはこの川の近くにある友人の旅館に泊めてもらい花火を見ているのだが、相変わらずたくさんの人が川辺に座って花火を見て、翌日にはキャンプ客や泳ぎに来る人々であふれかえる。人間にとっても川にとってもこれほど幸せに相互共存できるケースはなかなかないであろう。これから先ずっと豊川は存在するが、周りの人々が楽しんで時間をすごせるような川であることを強く願う。